

ハワイにおける野球選手育成についての報告

Report of survey about the training system of Baseball player in Hawaii

大西昌美

Masami ONISHI

キーワード：野球，選手育成システム，練習環境，日米の野球比較

I. はじめに

1939年 Baseball 誕生100周年を記念してアメリカ・ニューヨーク州のクーパースタウンにベースボール名誉の殿堂 (National Baseball Hall of Fame) が建設された。その約100年前、アブナー・ダブリューによって従来から行なわれていたタウンボールやトワイライト・ボールとは異なる新しいボールゲームが始められたといわれている。当時、ベースボールはイギリスで生まれたラウンダースを改良して生まれたものとするヘンリー・チャドウィックとアメリカで生まれたスポーツであるとの強い信念を持つA・G・スポルディングが激しい論争を繰り広げていた。この論争をきっかけにベースボールの起源究明委員会が創設され1907年暮れにアブナー・ダブリューの説を起源とする結論づけた。

日本における野球の渡来の説も一般的に明治6年開成学校の米人教授ウィルソンとマジレットにより学生に伝えられたとする説と、その前年の明治5年第一番中学ですで行われていたとされる説とがある。いずれにしても明治11年には日本最初の野球チーム「新橋倶楽部」が誕生した。野球という訳語は、明治27年一高野球部の中馬庚が名付け親といわれている。

こうして始まった野球は日本では最もメジャーなスポーツとして全国に普及していった。

ハワイ大学野球部及びアイランド・ムーバーズとの交流は、平成10年日本体育大学野球部の監督を率いていた時代から始まり、北翔大学に赴任してからも継続している。

今回は平成22年7月22日から8月2日までアイランド・

ムーバーズのコーチとしてチームに加わり渡米した。8月3日からは本学野球部と現地で合流し、本学チームの監督として指揮をとった。

また、7月24日から7月26日まで関西学生野球連盟選抜チームと交流戦を3試合行なった。練習と交流試合を通じて日本の「野球」とハワイの「ベースボール」との練習環境とその内容について視察を行なったので報告する。

II. 研修内容と成果

1. ハワイ・アイランドムーバーズの概要

ハワイ・アイランドムーバーズは、ハワイ州の大学野球選手を中心とし、メインランドの選手も含めた選抜チームである。毎年、ハワイ・韓国・日本の大学が夏季休暇中に遠征し、約30試合をこなして実践的な技術を身に付けると共に、野球だけでなく国際的な視野を広げる目的で活動している。遠征終了後はハワイにもどり、約2週間の練習と試合を行いチームは解散する。この野球を通じた教育活動はチーム発足後25年が経っている。

2. ハワイ・アイランドムーバーズのスタッフ

アイランドムーバーズの選手25名に対し、監督を含め6名の充実したスタッフが揃っている。各アシスタントコーチは内野手、外野手、投手、バッテリー、打撃、走塁と担当が分かれており、担当以外のことについては練習中一切口を挟まないことが徹底されていた。GM、監督、アシスタント・コーチ及び選手構成は以下り通りである。



ドナルド・タカキ GM



リチャード・オルセン監督
ミルウォーキー・ブルワーズ, 阪神タイガース, ベネズエラ
イタリアで13年間プロ野球選手(投手)として活躍



ギャレン・キタムラ
アシスタントコーチ
コロラド州立大の内野手として活躍



レス・ルー
アシスタントコーチ
レアリエア高イオラニ校監督



ブレイン・ムロオカ
アシスタントコーチ
HPUで外野手として活躍
プナホウ校アシスタントコーチ
現在もホノルルリーグの選手



マリオ・モニコ
アシスタントコーチ
ハワイ大学で外野手として活躍
首位打者を3度のタイトルを獲得
ミルウォーキー・ブルワーズの選手として6年間プレー



ランディー・ヤマシロ
アシスタントコーチ
シンシナティー・レッズ スカウト
アジア地区コーディネーター

選手

1. Pulama Silva Yavapai College
2. Kevin Matsumoto Hawaii Pacific University
3. Kamakani Usui Santa Rosa Junior Corllege

4. Toby Inouye Hawaii Pacific University
5. Jyungo Murayama Osakagakuin University
6. Hiroshi Kobayashi Osakagakuin University
7. Davis Townen San Diego State University
8. Brett Kilberg Canada Junior College
9. Clayton Uyechi University of Hawaii - Hiro
10. Chris Pascual University of Hawaii - Hiro
11. Lyle Kitagawa Fullerton Junior College
12. Takayuki Yamashita Osakagakuin University
13. Kyle Kanehoro Oregon State
14. Russell Doi University of Hawaii
15. Issac Kitamura University of Hawaii
16. Ryson Mauricio Oregon Tech
17. Jordon Monico Savanna State University
18. Danny Higa College of Southern Nevada
19. Daniel Jhonston Canada Junior College
20. Davin Hawahine University of San Diego
21. Toshihisa Hirai Osakagakuin University
22. Breland Almadov University of Hawaii

選手22名のポジション別人数は、投手10名、捕手2名、内野手7名、外野手3名である。選抜チームであり、試合数も多いので投手が10名と多くなっているが、アメリカのチームはどこも複数のポジションをこなせるように中学、高校時代に訓練・指導されている。実際に投手が捕手として出場したり、また、代打として打席に立つこともしばしば行われていた。日本では小学校の高学年ですでにポジションが固定されることが多く、他のポジションができない選手が非常に多い。近代野球においては複数のポジションをこなせるユーティリティー・プレイヤーの育成が必要であろう。このことによって偏った身体の使い方を避けることができ、オーバー・ユースによる怪我の予防にもなると思われる。オーストラリアの少年野球では必ず一打席ごとに打席を変えることをルールで定め、バランスよく身体と技術を鍛え、怪我の防止を図っているそうである。その結果として、スイッチ・ヒッターを多く育成することができ、戦術的な広がりできています。勝利至上主義に蝕まれている日本の少年野球も見習うべき育成方法である。

3. ハワイの野球施設

次に野球場について日米との比較をしてみたい。今回はハワイ大学のレス・ムラカミ スタジアム, カートライト地区野球場, ミッド・パシフィック・インスティテュート野球場, カイルア・ハイスクールなど、4カ所の野球場を使用することができた。基本的にアメリカの球場はインフィールドも芝生である。ただし、走路や内

野の守備位置に関しては土になっている。土は日本の土とは大きく異なり、アンツーカーのようになっており比較的粒が粗い。日本の土は砂と黒土がブレンドされており、非常に軟らかく整備されている。一方アメリカの球場の土は非常に固く、そのために打球も速い。日本ではスライディング時に硬いグラウンドは怪我をしやすいという考えが定着しているが、それとは逆にアメリカでは硬いグラウンドでなくてはすスライディング時にすべりが悪く危険であると考えている。マウンドについても同様にハワイのそれはスパイクの歯が刺さりにくいほど硬い。本学の投手は踏み出し足がぶれにくいので投げやすいという感想であった。それぞれの野球場について紹介する。



写真1 人工芝

University of Hawaii Les Murakami Stadium

ホームベース付近の円の中とピッチャーマウンドだけが土で、後は全て人工芝。(走路及び各ベース付近も人工芝) 芝の葉が長くなっており細かいゴムチップが撒かれており、スライディングによる火傷も防ぐことができる。スパイクシューズでも人工芝用シューズのどちらでもプレーが可能である。ただ、スライディングをするとかなりすべりが良いので慣れが必要である。グラウンド整備は二カ所の土の部分だけであり、また、ラインも打席部分だけひけば良いのでランニング・コストは安い。



写真2

10,000人以上収容可能なスタジアムの観覧席



写真3 照明

ナイトゲーム前のシートノックの様子。高い位置の設置された照明は光度も十分にあり、選手達の照度不足による怪我はない。



写真4 雨天練習場

スタジアムのレフト・ファールエリアの横に雨天練習場がある。二ヶ所で打撃練習と投球練習ができるようになっている。



写真5 ブルペン

ブルペンは1・3塁側両方に設置してあり、どちらも3人が同時に投げられるスペースを確保してある。写真を見てもわかるように、非常に固い土で軸足、フリーフットの接地部分がほとんど掘れていない。



写真6 スタジアム入り口

入り口は日本のプロ野球場と同じ作りになっている。写真はチケット売り場になっており、オフシーズンにはプロ野球のウィンターリーグも行われている。



写真9 フットボール場とドミトリー

野球場の横に多目的フィールドとフットボールフィールドが併設されている。芝がしっかりと管理されており、選手が泥まみれになることもない。後方の円形のビルがドミトリーとなっている。



写真7 ニックネーム

ハワイ大学は山の中腹にあるため、スコール時に虹がよく見えることから、全てのスポーツのニックネームを「レインボウズ」と定めている。



写真10 試合後の食事

ナイトゲーム終了後、ハワイの選手達の父母が夕食の準備をしてくれる。折りたたみのイスと机が球場内に用意されており、温かい夕食が取れるシステムになっている。



写真8 ディスプレイ

スタジアムに入ると、歴代の名選手、監督に関する展示物が用意されている。球場名となっているレス・ムラカミは全米の大学野球監督の中でも特筆すべき勝率を誇った監督である、



写真11 球場に設置されたフードマップ
公式戦開催時には様々な食事ができるようになっている。



写真12 歴史ある球場

カートライト地区野球場は、野球の父アレクサンダー・カートライトがハワイに野球を伝えたことから Cartwright Neighborhood Field という名前が付けられたといわれている。老朽化が進んでいる球場ではあるが、試合をするには十分な広さ、内外野の天然の芝、ナイトゲームをするには十分な照明設備がある。小さい観客席ではあるが屋根もついており不自由はない。この世に野球が生まれて最初のチーム、ニューヨーク・ホーボーケンの「ニックカーボッカーズ」を創ったアレキサンダー・カートライトの名前がついた野球場にいることに興奮を覚えた。



写真13 カートライト地区野球場



写真14 夕暮れの球場



写真15 カイルア・ハイスクール野球場

ホノルルから車で30分ほどの所にあるカイルアハイスクールの球場も他の球場同様に内外野天然芝に覆われている。チームのニックネームは「サーフ・ライダーズ」いかにもハワイらしい名前である。



写真16 ダッグアウト

簡単な作りの二階建てのダッグアウトが、非常に良くできている。選手が座るベンチの前には金網のフェンスが張られており、打球が当ることはない。二階席はゲストボックスや、練習時にはコーチが全体の動きを見渡することができる。スペースを広く取れない場合には非常に参考になる作りである。



写真17 スコアボード

コンパクトサイズのスコアボードだが、日本の高校、大学にはこのような発想の野球用スコアボードはない。低予算で設置することが可能なので、日本でも公立高校などの野球部は参考にすると良い。



写真18 スプリンクラー

アメリカの球場，その他の芝生のある施設には必ずといっていいほどスプリンクラーが設置されている。気候条件の差はあるが，芝生を良い状態に保つための最低限の設備である。



写真19 ミッド・パシフィック・インスティテュート野球場

ホノルル郊外にあるこのフィールドはやや小さいが，様々な工夫がなされており，非常に参考になった。スプリンクラーのついたこの球場もしっかりと芝が管理されていた。



写真20 ブルペン

ブルペンは3人が投げられるようになっている。マウンド以外は人工芝が敷き詰められており，その他の通路もコンクリートで覆われている。そのため泥が球場外に落ちることがなく，非常にきれいな状態を保っている。



写真21 クィック・フット・ラダー

コンクリートで舗装された場所にペンキでラインを引きラダース・ベースとして有効に使っている。



写真22 散水用ホース

自動車のホイールを利用して，散水ホースを収納する。簡単なことであるが，このような発想は指導者の競技に対する強い熱意から生まれるものである。



写真23 ボール磨き

DIY用のコンクリートミキサー・マシンに消しゴムを入れて準備完了。汚れたボールを中に放り込み，スイッチを入れればボール磨きの完了となる。アメリカ人の発想は実にユニークで面白い。

4. ハワイで見た野球練習用具について

これまで各球場にあるユニークなアイテムを見てきたが、次に練習用具についての報告をする。ベースボール発祥の地であるアメリカの練習用具も実に合理的かつ科学的なものが多い。これだけ野球が盛んに行われている日本であるが、まだまだ取り入れるべきものが多い。



写真24 移動式ピッチャーマウンド 1



写真25 移動式ピッチャーマウンド 2

アルミ製の簡易マウンドはどこでも投球練習を可能にする。アルミ製のため非常に軽量、片側にタイヤが取り付けられているために一人で移動が可能である。雨の日には体育簡易持ち込めば投球練習が可能となる。

人工芝が張られているため、スパイクでの投球練習はできないがアップシューズで投球しても滑ることはない。



写真26 バッティング・ケージ

アルミ製のケージには大きなタイヤが3個取り付けられている。軽量に作られているため、2人で押して移動することが可能である。また、錆が付くこともない。



写真27 インサイダー

打撃練習用の練習用バット「インサイダー」は、バッティングの基本動作をマスターするために非常に優れている。打撃動作の中で右打者の場合、振り出すときの右肘の使い方が重要になってくる。黒意ゴムの部分を握ってスイングするがグリップ部分はバットのように丸くない。そのことによって自然と正しいグリップが作れるようになっている。また、金属部分は角度がついておりインパクトの部分はフラットの金属板が取り付けられている。そのため、振り出すときに右肘を押し込んでいかないと、ボールの外側を叩くことになってしまう。ライト方向、センター方向、レフト方向に打ち分けるために右肘をどのように使えば打球面がしっかりとその方向に飛ぶか、身体で覚えることができる。



写真28 インサイダーを使った練習

少年野球の練習で、インサイダーを使って実際に使用しているところである。ティースタンドを使ってウィッフル・ボールを打っている。指導者はインコース、アウトコースのミーとポイントと肘の使い方を丁寧に指導していた。

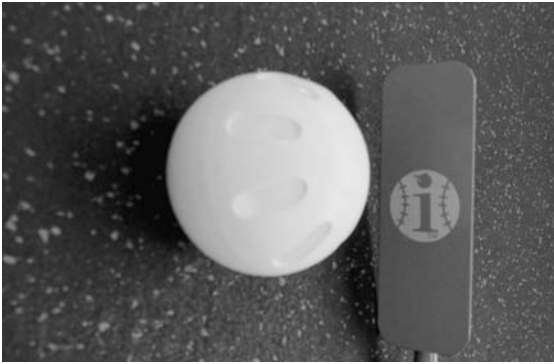


写真29 ウィッフル・ボール

ウィッフル・ボールはプラスチックでできた穴の空いたボールで二種類ある。一つはボール全体に均等に丸い穴が空いたもので、一般的には室内で練習する際に使用するものである。もう一方は半面に楕円形の穴が複数空いており、握りを変えることによって様々な方向へ鋭く変化するものである。このボールを使ったゲームや正式な大会も行われている。また、この試合専用球場も数多く作られている。



写真30 2種類のウィッフル・ボール

写真30の左側のボールが変化しないボールで、右側は変化しやすいボール。

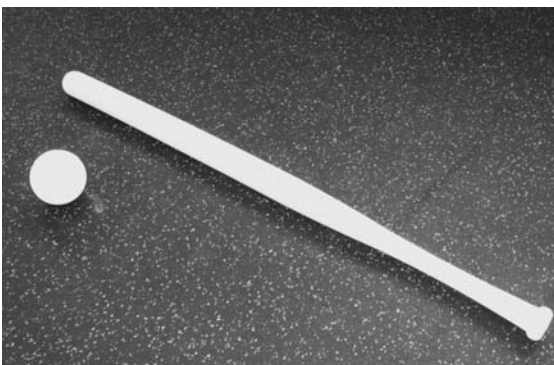


写真31 競技用ウィッフル・ボールとバット

バットはプラスチックでできており、中は空洞のため非常に軽く子供から大人まで男女を問わず扱えるようになっている。



写真32 ウィッフル・ベースボール専用ミニ・スタジアム
(WIFFLE BALL THE ULTIMATE GAIDE HERMANN
引用)¹⁾

5. ハワイの少年野球指導

ハワイ大学のレス・ムラカミ・スタジアムで少年野球指導が行われていた。対象となっていたのは小学生の低学年。恵まれた環境の中で、それぞれが思い思いの服装で練習していた。野球場の中央には水分がいつでも補給できるように、氷の入った冷たい水が用意されている。常に楽しそうな笑い声の中で、ハワイ大学野球部の学生が優しく語りかけるように指導していた。日本の少年野球は高校生と同じような挨拶から始まり、大きな声を張り上げるコーチの声が響き渡り、子供達が萎縮しているような場面をしばしば見かける。ハワイの夏はかなり気温が高いため午前9時から1時間程度で練習を終えるようなプログラムだった。様々な場所でスローイングの基本技術と捕球技術を教えていたが、一つ一つのドリルが短時間で終わり、子供達が飽きてしまうような様子は決してなかったことに感心した。コーチの人数も10名以上おり、技術を者、全体を監視するもの、ドリルの準備を行うものに分かれておりスムーズに練習が進んでいた。



写真33 少年野球の練習風景 1.
外野手の守備練習を指導している場面



写真34 少年野球の練習風景 2.
ゴロ捕球の基本動作を指導している場面

子供のころから「ステイ・ロー」「ソフト・アーム」を徹底して教えている。グラブを低く構え、両腕は常に力を抜いて柔らかく構える。そして「スロー・アンド・シュアー」遅くとも、正確にプレーすることを教えていた。大学生のプレーを見ていてもそのことが徹底されているように思われる。

Ⅲ. ま と め

日本における学校体育の中でのスポーツの位置付けとハワイとの格差を痛感した。高校の施設や大学の施設を見ても野球だけに限らず、各スポーツ施設が整っている。経済的な面の違いはあるが要因はそれだけではない。スポーツの持つ教育力を十分に理解しているからであろう。

各施設が充実しているために、スポーツをしようとする意欲が強く非常に強く、父母たちも協力的である。モチベーションの高い選手達とそれよりさらに情熱的な専門の指導者がいることによって大学全体に活気があり母校にプライドを持っている。また、練習用具を科学的見地から工夫・開発している。日本の野球は指導者が小学校3・4年生を境にして、勝つことを目的とした野球に

走り始めることが多い。中学・高校ではそれに拍車がかかり、早い子では中学でバーン・アウト現象が起きている。そのような現実遭遇した指導者は「あいつは根性がない」と切り捨てているのが現状である。幼少期、いわゆるゴールデンエイジといわれる子供達にとって一番大切な時期に、スポーツの楽しさを科学的な視野を持った指導者が必要である。日本では幼少期に野球を始めた頃から試合をすると、大人と同じルールで行うのが一般的であるが、アメリカではティースタンドを使ったベースボール型球技を行う。最近では日本でも野球をより普及させるためにティーボールから始めることを行うようになってきているが、アメリカではもう一工夫している。通常はスリーストライク目を見逃したり、空振りすると三振となるが、アメリカでは6ストライクで三振としているチームが多い。その狙いは打つ楽しさを覚えるチャンスを多く与えることにあるという。そのようなことを一つとっても今回のハワイの研修で多くのことが再確認できたと同時に、スポーツ環境の充実と、指導者の競技に対する情熱と工夫が不可欠であると感じたしだいである。従来から行われている日本の練習方法から脱却し、新しい野球選手育成方法を検討していきたいと考えている。

付 記

本研究は、「平成22年度北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター研究費」の助成を受けて実施したものである。

文 献

1. Hermann M : Wiffle Ball : The Ultimate Guide, P.119, Triumph Books, Chicago, 2010.

